

大学における器楽教育(その2)トロンボーンのための の楽曲研究

著者	千葉 圭説, 中野 耕太郎
雑誌名	北翔大学教育文化学部研究紀要 = Bulletin of Hokuso University School of Education and Culture Department
号	6
ページ	125-135
発行年	2021
URL	http://doi.org/10.24794/00003337

大学における器楽教育 その 2

トロンボーンのための楽曲研究

Instrumental Music Education at University Music research for Trombone instruments

千 葉 圭 説 中 野 耕 太 郎^{*1}
CHIBA Keisetsu NAKANO Kohtarō

はじめに

全国の小学校、中学校から高等学校まで吹奏楽の人気により金管楽器であるトロンボーンを演奏する児童、生徒が増えてきた。各地域の吹奏楽連盟が 1 年に 1 度行う独奏コンクールでも多くの児童、生徒がトロンボーンでの参加が増え、日本におけるトロンボーンの独奏曲のレパートリーや指導法、演奏法について再確認が必要であると認識した。トロンボーンという楽器は普段、吹奏楽やオーケストラの中で活躍するもので独奏楽器として旋律も奏できるようになったのは、20 世紀に入ってからです。西洋では教会や宮廷で使用する神聖なる楽器として発展しオーケストラで初めて使用されたのはベートーヴェンと言われている。その後、多くの作曲家が交響曲の作品の中で使用され多くの聴衆の耳にこの楽器が溶け込んでいくことになる。現在では独奏楽器として CD で演奏を聴けるほか、アマチュアから専門家までが YouTubeなどで演奏を公開し一般の人々までが気楽にトロンボーンというものを楽しむことができる時代になった。このような状況の中で器楽教育の一つとしてトロンボーンをどのように発展させ、音楽教育の中で役立てられるか考えたい。

目 的

独奏楽器として小、中、高校、大学までの部活動でのトロンボーン演奏から教育系大学で専門に楽器を学ぶ器楽教育についてまでそれぞれのレベルでどのような作品が適しているか、また練習教材はどういうものがあるのかを紹介したい。さまざまな独奏コンクールが開催される中、特に初心者レベルの奏者に合う楽曲が少なく、専門家が演奏するような作品を無理して演奏する、小学生や中学生もあり、初級者向けに作曲された作品を演奏していない。多くの作曲家も専門家を対象によりテクニカルで音楽的な難しい作品を提供する傾向になり小学生でも演奏可能なオリジナル楽曲はきわめて少ない。下記に提示する曲は数少ない独奏作品の中からそれぞれの実力に適した、演奏可能なものを選び、演奏上のヒントや楽曲分析を含めて紹介している。

*1 札幌交響楽団トロンボーン奏者

独奏作品紹介 1（初級）

曲目：Sång till Lotta 作曲者：Jan Sandstrom

楽曲：速いパッセージなどはなく、全体的に穏やかな印象の美しい楽曲。調性がB♭ major という事で、B♭ 管のトロンボーンで演奏しやすい楽曲となっている。この楽曲にはテナー トロンボーン版とバストロンボーン版があるが、今回選んだのはバストロンボーン版である。初級者には音域がちょうど良く、ソロ曲を演奏したことのない児童、生徒に適している。最初のフレーズにスラーなどのアーティキュレーションは書いていないが、なるべく音が途切れないように滑らかに演奏する。8小節目に初めて16分音符が出てくるが、このメロディーは速くならないようにたっぷり演奏すると良い。25小節目に転調があり、28小節目には5ポジションで演奏するG♭の音が出てくる。5ポジションは初級者には適切な音程で演奏するのが難しいため、チューナーなどで正しい音程を把握し、繰り返し演奏する事で慣れる必要がある。バストロンボーン版なので比較的低い音域も出てくるが、その音域を練習する事で豊かな音色を目指すことができる。

参考楽譜 1

Sång till Lotta
för trombon och piano

Jan Sandström 1991

The image shows a musical score for 'Sång till Lotta' by Jan Sandström. The score is for Trombone (Lotta) and Piano (Christer). The tempo is marked as 76-80. The key signature is B-flat major. The score is divided into two systems. The first system shows the beginning of the piece, with the piano accompaniment providing a steady eighth-note accompaniment in the right hand. The trombone part enters with a melodic line. The second system continues the melody, showing a key change to C major at measure 25 and a 5th position G-flat note at measure 28.

楽譜引用：Tarrodi Edition

独奏作品紹介 2（初級）

曲目：SONATA No.1 in B♭ major 作曲者：Antonio Vivaldi

楽曲：元々はチェロソナタで、トロンボーンのためにアレンジされた楽曲。Largo, Allegro, Largo (ben declamato), Allegro, の4つの楽章で構成されている。この楽曲も調性がB♭ majorなのでトロンボーンで演奏しやすい。2曲目のAllegroは跳躍なども多く難易度が高いため、1曲目と4曲目を選択して演奏させる事が多い。譜面がテノール譜表で表記されており初級者では読む事が難しいので、バス譜表に書き換えて演奏すると良い。1曲目Largoは一見音符が細かく難易度が高そうに見えるが、ゆったりとしたメロディーで歌いやすい曲。3小節目からのスラーのフレーズが長くなっており、トロンボーンでは一息で演奏するのが困難なため、小節線のところや2拍目と3拍目の間などでブレスを取って演奏させる。4曲目Allegroは16分音符のパッセージなどがあり、難易度が上がる。一般的なAllegroのテンポだと演奏が難しいので、少しテンポを落として演奏させる。テンポが遅くなることで音楽が重くなりやすいが、アタックをクリアに演奏する事や音を長く吹きすぎない事などに注意して、軽やかに聴こえるようにする。

参考楽譜 2

SONATA No.1
in B♭ major, RV 47
for Trombone and Piano⁺

*Revision and realization of the Figured Bass
by LUIGI DALLAPICCOLA*

ANTONIO VIVALDI
(1678-1741)

Largo⁺
(Largamente, ma Andante)

The musical score is written for Trombone and Piano. It begins with a key signature of two flats (B♭ major) and a 4/4 time signature. The tempo is marked 'Largo⁺ (Largamente, ma Andante)'. The score includes various musical notations such as notes, rests, slurs, and dynamic markings like 'f espr.', 'marc.', 'sost.', 'espr. sonoro', 'marc. poco', and 'sempre sonoro e sost.'.

楽譜引用：INTERNATIONAL MUSIC CAMPANY

独奏作品紹介3（中級）

曲目：CONCERTO 作曲者：Rimsky-Korsakov

楽曲：トロンボーンソロ曲には有名作曲家の作品が少ないので、このリムスキーコルサコフのコンチェルトはとても貴重な作品である。そしてこの曲も調性がB♭ majorであるため、演奏しやすい楽曲となっている。急緩急の3楽章形式だが、楽譜には明確に楽章の表記はされていない。1楽章 Allegro vivace は華やかなファンファーレ風のパッセージで始まる。音が長くなってしまうと華やかさが出ないので、スタッカートや歯切れよく演奏できるようにしなければならない。Cからは曲調が変わりスラーの滑らかなメロディーになる。トロンボーンでスラーのメロディーを演奏するのは大変だが、息の流れを意識してなるべく柔らかい音色で吹けるように練習させる。中級の楽曲という事で音域も少し広がっており、高音域を豊かな音色で演奏できるように努力しなければいけない。2楽章 Andante cantabile は暖かい曲調のゆったりとした楽章だが、調性がG♭ major になっているため音程を取るのが難しい。音階練習などを活用して慣れる必要がある。2楽章最後のカデンツァからそのまま3楽章の Allegro に入るが、Lからすぐ Allegretto に変わっている。中間部に3連符の難しいパッセージも出てくるので、少し落ち着いたテンポ設定にすると良い。リズムカルなメロディーなので、スタッカートの練習などをする事で軽快に演奏できるようにしなければならない。

参考楽譜3

Concerto
for Trombone and Military Band (1878)

Nikolai Rimsky-Korsakov
edited by Clark McAlister

Allegro vivace

ne solo

piccolo

grandi I

II

oi I

II

otto Es

I

etti B II

III

*F

楽譜引用：Edwin Kulms

独奏作品紹介 4（中級）

曲目：CAVATINE 作曲者：Camille Saint-Saens

楽曲：サンサーンス作曲の貴重なトロンボーンソロ作品。ダイナミックで優雅、そして中間部の旋律は繊細で美しい。サンサーンスの魅力が詰まった楽曲である。冒頭 Allegro の 4 分音符は音色や音の形が崩れやすい。音域の幅の広いリップスラー練習などを活用して、下から上までしっかり鳴らせるようにすると良い。その後に出てくる 8 分音符の分散和音は音程を正確に演奏する事が難しいので、テンポを遅くし何度も繰り返し練習をしてスライディングを体に覚えさせる必要がある。他の部分の 8 分音符も同様に、テンポを遅くして練習すると良い。中間部 Andantino は調性が E major になっていて、# 系の調に慣れていない吹奏楽部の児童、生徒にとっては難易度が高い。やはり音階練習などで慣れる必要がある。⑤の後にとっても低い B♭、B♭♭、A♭の音が出てくるが、この音を出すのは上級者にならないと厳しいため、出ない場合は 1 オクターブ上げて演奏させる。この楽曲最後の高音 D♭の音も難易度が高いので、出ない場合は下を書いてある A♭の音を演奏すると良い。

参考楽譜 4

カヴァティーナ

作 曲: Camille Charles Saint-Saens

The image shows a musical score for the piece 'Cavatine' by Camille Charles Saint-Saens. The score is for Trombone and Piano. The tempo is marked 'Allegro'. The key signature has two flats (B-flat major). The time signature is 3/4. The score is divided into two systems. The first system has 4 measures, and the second system has 4 measures. The piano part has a forte (f) dynamic marking in the first measure of the first system. The score includes a first system with 4 measures and a second system with 4 measures. The piano part has a forte (f) dynamic marking in the first measure of the first system.

楽譜引用：YAMAHA MUSIC MEDIA

独奏作品紹介 5（上級）

曲目：CONCERTPIECE 作曲者：Alexandre Guilmant

楽曲：フランスの作曲家でオルガニストでもあったA.ギルマンの作品。場面ごとの表情が豊かで、音楽表現をしっかり勉強できる素晴らしい楽曲である。Andante sostenutoの冒頭、ピアノの前奏に引き続きトロンボーンが弱音で演奏する。調性はE♭ minorで♭が多く難易度が高いため、丁寧に音程を確認しなければいけない。弱音であることを意識し過ぎると息が入らなくなり音が出なくなってしまうので、柔らかい音色をイメージして音をしっかりと鳴らすようにすると良い。中間部は速いテンポで演奏する参考音源が多いがAllegro moderatoなので、後半に出てくるpiu mossoでテンポが上がる事も考えて速くなり過ぎないように演奏させる。dolce, con calma, con fuocoなどの音楽用語が随所に出てくるので、意味をしっかり理解して演奏しなければいけない。その後、冒頭の短調の旋律が長調になって出てくるので、音が違うだけではなく音色で音楽の違いを表現できると良い。最後の部分に出てくるトリルは、リップトリルを使用して演奏することが多い。しかしリップトリルは難易度の高いテクニックなため、この曲ではF管のレバーを使用して演奏することも可能である。

参考楽譜

A mon ami THÉODORE DUBOIS,
Directeur du Conservatoire National de Musique, Membre de l'Institut.

MORCEAU SYMPHONIQUE
POUR
TROMBONE TÉNOR ET PIANO.

PAR
Alexandre GUILMANT.
(OP. 88.)

楽譜引用：INTERNATIONAL MUSIC CAMPANY

練習曲紹介 1（初級）

曲目：Method for Trombone 作曲者：Jean Baptiste Arban

楽曲：アーバンは最初に取り組む練習曲として最適な教本である。初級者に練習させるのは最初の部分だけだが、基礎的な要素を網羅している。20ページ11番から4分音符の練習。24ページ28番から8分音符の練習。30ページ1番からシンコペーションの練習。33ページ13番から付点の練習。35ページ19番から16分音符の練習。39ページ28番から8分の6拍子の練習。音を並べるだけであればそこまで難しくないが、音色を崩すことなく音型をしっかりと揃えるのは上級者でも意外に難しい。シンコペーションや付点の吹き方が分からない児童，生徒も多いので，この練習曲を演奏することで解決できる。後述するコブラッシュを練習する前に必ず練習したほうが良い練習曲である。

参考楽譜



(20ページ11番から4分音符の練習)



(24ページ28番から8分音符の練習)



(30ページ 1 番からシンコペーションの練習)



(33ページ13番から付点の練習)



(35ページ19番から16分音符の練習)



(39ページ28番から 8 分の 6 拍子の練習) 楽譜引用：CARL FISCHER

練習曲作品紹介 2（初級）

曲目：Lip Slur Melodies 作曲者：Brad Edwards

楽曲：曲名の通りリップスラーのみで全てのスラーが演奏できるようになっている練習曲。通常トロンボーンはスラーを演奏するときにリップスラーとレガートタンギングを組み合わせて演奏している。スラーの中を全てノータンギングで演奏すると、ポルタメントが入ってしまうからである。リップスラーは金管楽器奏者にとって一番重要と言っても過言ではない練習なのだが、その効果を本当の意味で理解して吹いている児童、生徒は意外に少ない。よく演奏されるリップスラー練習が、単調な音の往復であるために息の流れやフレーズ感を意識しづらいのも原因の一つだと考える。この練習曲はリップスラーの練習でありながらメロディーになっているので、前述した問題を解決するのに適している。初級としているが後半になるにつれて難易度が上がるため、各自のレベルに合わせて曲を選択すると良い。

参考楽譜

Part 1: Getting Started

Moderato

1.1 *mf* *mp* *f*

Moderato

1.2 *mp* *cresc.* *mf* *mp* *mf* *mp*

Allegretto

1.3 *mp* *mf* *rit.* *mp*

楽譜引用：出版社 Brad Edwards Lip Slur Melodies

練習曲紹介 3（中級）

曲目：Melodious Etudes for Trombone 作曲者：Joannes Rochut

楽曲：吹奏楽部で活動していると、トロンボーンが滑らかな旋律を演奏することは極めて稀である。そのためソロ曲に取り組んでも中々上手く演奏することができない。この練習曲に取り組むことでソロ曲を演奏するための基礎を学ぶことができる。練習曲は1巻が60番までであり、スラーが多用された美しい旋律となっており調性や拍子は多岐にわたる。初級で紹介したリップスラーメロディーズではリップスラーのみでスラーを演奏することができたが、この教本ではレガートタンギングも使用しなければいけない。まずスラーの中を息の流れを意識してノータンギングで演奏し、リップスラーで演奏できることを確認する。その後、ポルタメントが入ってしまう音だけレガートタンギングを加えて演奏する。時間はかかるが、全てのフレーズでこの練習をしなければいけない。

120 Melodious Etudes
for
Trombone

From the Vocalises of
MARCO BORDOGNI

Book One

Selected and Transcribed by
JOANNES ROCHUT

No.1 *Andante* (♩ = 60)

ritard.

楽譜引用：CARL FISCHER

練習曲作品紹介 4（上級）

曲目：60 Etudes for Trombone 作曲者：Georg Kopprasch

楽曲：音楽大学の入学試験でも課題になることが多い教本で、様々なアーティキュレーションが駆使された練習曲が60曲入っている。34番までが1巻、35番からが2巻と別れていたが、今回紹介する版では1冊にまとまっている。2巻のほうが難易度が高くなるので、まずは1巻が演奏できるようになってから2巻に取り組むと良い。メロディックの曲もあるが、速いテンポでの16分音符の連符、2オクターブ以上の跳躍などテクニカルな曲が多く出てくる。1番から4番までは初級で紹介したアーバンの応用編のような曲である。5番以降、速いテンポでのスラーが出てくるが、中級で紹介したメロディアスエチュー

ドと同様に、リップスラーで演奏できるところとレガートタンギングをしなければいけないところを見極めて練習する必要がある。どの曲も必ず遅いテンポから練習をして、音程とスライディングを体に染み込ませてから指定テンポを目指すが良い。

参考楽譜



楽譜引用：全音楽譜出版社

ま と め

器楽教育としてトロンボーンを学ぶ上で重要且つ、代表的な独奏曲や練習曲を紹介したが、初級レベルには発音の仕方を中心としたもの、中級以上ではトロンボーンならではのスラーの演奏方法であるリップスラーとレガートタンギングでのスラーの練習を多く入れた内容である。このスラーに関しては他の金管楽器とは違う要素が含まれてくる。教員養成大学では自らが演奏できる技能を身につけるだけでなく、指導者の立場になったことを想定した学びも必須となる。そのためにも多くの演奏経験が必要となり、吹奏楽やオーケストラでのハーモニーを主に奏でる楽器としての経験、独奏者としての演奏力の両方を確立することを第1条件にし、練習曲や独奏曲のレパートリーの開拓、指導方法について研究し指導力を身につけてほしい。

本研究は、これまでの筆者の演奏経験や指導者として活動から各レベルに応じた楽曲を選択した。多くの教則本等は海外からの輸入版となり演奏法のヒントや大切な事柄は英語などの外国語である。中、高校生の奏者はこの英語などの解説を読まずに演奏、練習していることが多く、楽譜に書かれている音符ではない多くの内容を読み取ることも良い演奏するための条件になる。

参考文献・引用文献

Brass Instruments Their History and Development A.ベインズ著 Dovers books 出版
 楽器解体新書 トロンボーン誕生ストーリー ヤマハより

URL: https://www.yamaha.com/ja/musical_instrument_guide/trombone/structure/

